

自然の現象としては説くことが出来ないのではありません。さう云ふ風に色々な価値を善とか美とか真とかと云ふ所の、さう云ふ価値に結び付けて、事實を考へる観方が自然科学に反對する一つの新しく出た観方でありま

す。即ち価値を入れて考へる観方でありま

す。此価値と云ふのは即ち人々が生活する上に於て最も望ましいものであると考へた所のものであります。それが即ち此場合に於ける価値であります。価値と云つても色々あります、長く価値の有るものもあるし、直きに無くなつてしまふものもあります。そこで価値には相対的価値と絶對的価値と二種の別を設けることが出来る。例へば餓えた時に食を攝る、是は非常に価値の有ることでありま

す。食物は価値の有るものでありま

す。併ながら食物は腹が脹つてしまへば後は価値が無い、眼の前にあつても食ひたくも何もない、寧ろ腹の滿つて居る時に其處に餘り御馳走が列んで居ると好い心持がしない位であります。さうすれば其価値は其場合に於てどうしても絶對と云ふことは言へないと思ふ、其時々々に依つて變るものであると思ふ。さう云ふ種類の価値が随分あります。併ながらどう云ふ事情に於ても變らない価値が有るとしたならば、それは最も望ましいものであつて、即ち絶對的の価値と言はれるべきものであります。さう云ふものは果して明確に探すことが出来るかどうかと云ふと、具體的にはそれは分らない。具體的に定めることは出来ませぬが抽象的に形式的に唯さう云ふ価値を考へて見ることが出来る。それは例へば今申す善なるもの、美なるものであると云ふことは明かでありま

す。何が善であるかと、具體的に定めることになると、是はどうしても變つて行くのであります。時勢に應じて變つて行く、昔は例へば總ての場合に於て讓ると云ふことが善である、それは一つの善でありませうが、今日に於ては餘り讓らない方が善である場合がある。例へば電車に乗ると

きに、お互が餘り讓過ぎて居れば電車が出ることが出来ないで困る。入口の方にばかり謙遜して居ると云ふことは、中へ入る者に對して非常に不便なことがある、かく善なる意味が内容から云へば變つて行くのであります。さう云ふ内容に關係した事を私は絶對と云ふことは出来ないと思ひますが、唯善と云ふやうなことを始終心懸けて行かなければならぬと云ふことだけは、是は變りない、即ちさう云ふ形式的抽象的の意味に於て若干の絶對価値を定めることが出来るやうに考へます。さうすると此吾々の生活の中の自然的でないものは斯う云ふ若干の絶對価値を假定して居る生活である。斯様に考へて宜いと思ふのであります。此人間の生活の段々と理想価値の方に向つて行く其道行を文化と云ふ語で現はすことが出来るとしたならば、今述べ

るやうな価値は即ち絶對的文化価値と云ふ語で言現はすことが出来るのであります。さうして見ると斯の如

き生活は自然科学的範圍にならないで、文化科學の範圍に屬するものであると云ふことが出来るやうになると思ふ。さう云ふ所から私は學問として二種を區別する通り、現象として自然的現象と文化的現象との對立と云ふやうに之を考へて見ることが出来ると思ふ。

此自然と文化と云ふのは大體に於て物質と精神と云ふ區別と似て居る譯であります。物質と精神とは或形而上學の方面から來て居るもので、私の今此處に言ふのはさう云ふ意味ではないのであります。そこで一致する所と一致しない所がある、大體に於て自然の現象は物質現象でありま

すが、唯心の現象を自然的事變として見て居る場合、或は法律や藝術を自然現象として取扱ふ場合には自然現象に屬すると言はなければ

りません。併ながら此精神の産物を或一つの価値に結び付けて文化を現はす一の手段であると考へて言つた場

合には、それは文化科學の領分に屬し、文化現象の位置として考へることが出来る。でありますから大體精



神現象と云ふ語で言現はすことが出来ませんが、併し精神現象の一部分は自然現象の中に入つてしまふ。圖に描いて言ふならば物質と精神は圓が兩方とも錯綜して居るやうな形になつて行くのであります。

此文化の現れる働きの即ち歴史であります、人間の歴史は詰り人間の文化生活の記録である。随つて歴史は此文化に特有なる所の價値を現して居るものでなければならぬ。人間の價値行爲を現はすものでなければならぬと云ふのであります、併し此處に一寸誤解が起る。人間の生活中、價値の有る行爲だけを書き記すものが歴史になる。さうすると詰り立派な人の嘉言善行録がそれが歴史になると云ふのであるかと云ふとさう云ふのではないのであります。茲に價値の有ると云ふのは必しも價値の有る善い事だけを選べと云ふのではないのであつて、人間の文化生活を完全に記述するに足りるやうな、さう云ふ現象を網羅したと云ふ意味であります。人間の文化價値に直接に關係の有る所の現象を悉く網羅したと云ふことであります。人間のした行ひの中にも特に記述される價値のないことが幾らもあります。吾々が路を歩く、例へば私の宅から此講堂まで來るのに、どう云ふ路を通つて來るか、どう云ふ風な電車の乗方をして居るかと云ふことは、私の仕事でありますけれども、大して私の生活に價値の有るものではない、どつちでも宜い、そんな事は忘れてしまつて宜い、が歴史の大勢に關係の無い事柄はドン／＼省いて行つて差支ないのであります。さうして全體の連絡を付けるやうにして、全體の意味の判るやうにするのが歴史の仕事であると言はなければならぬ。そこで随つて歴史は自然の出來事から自然の儘に考へたのでなくして、價値と云ふ考を入れて適當に選擇して現はして行かなければならぬ。さうなると此處に唯物史觀と云ふものが、成立しないことになつて來るのであります。唯物史觀によれば、歴史と云ふものは必然の關係で起つて來ることを、唯其儘記載したもので

あると云ふ譯であります。けれども必然の關係に依つて起つた事柄を、事實有りの儘に悉く記述して行つたならば、非常な長いものになるかも知れぬ、随分餘計なものが澤山入つて來るか知れぬ。それ故に其處にどうしても選擇をしなければならぬ。選ぶときには其處に全體の大局に關係の有る、即ち文化生活に對して價値の有るものが歴史に現れることになりす。随つて此處に歴史を作る場合に於ては全體に對して價値の有るものを選ばなければならぬ。全體とは何かと云ふと、それは絶對的文化價値を示す所のものである。それであるから歴史は人間の文化を完全に到達する道行を記録したものであると云ふ、それで幾らか選擇が出来る譯です。不完全に現して居る事で、どうでも宜いものは棄てしまつて宜い、其代り現象の良いものは残さなければならぬ。唯物論的に言ふ歴史だと云ふと、さう云ふ差別を設けない、それであるから唯徒に事實を陳列すると云ふやうになるか、さうでなければ其事實を勝手次第に選んで、さうして一般法則が出来るやうな形に直してしまふことに歸着してしまふのであります。吾々の謂ふ歴史はさう云ふものではないのであつて、其處に唯物史觀と違ふ所が出て來るのであります。言換へて見れば歴史は必然的の法則に支配されて居るものではない、自由意志を有つて居る人間が、或文化價値を構成して行かうと云ふ其手續を示すものであります。マルクスの言ふやうに階級の争ひが次第々々に無くなる成行を自然のまゝに示すものが歴史であると云ふのでなくして、其成行中全體の發達を示すに最も適當なやうな關係を選んで描寫するものでなければ、歴史にならぬと思ひます。或は長い間には流轉して行つたりして、次第に全體の文化價値を現すこともありませう。斯う云ふことは自然現象に對する所の現象即ち文化現象若くは歴史現象の特色である、歴史と云ふものは必しもさう云ふやうな目的に一致しないで現れて來るか知れぬ、さうなればそれで構はない、其方の觀



方から歴史を觀るならば、其はたゞ自然的に歴史を觀て居るのであります。併し一方の人はさうは觀ない。歴史には自然的の關係が這入つて來ることは認めて居る、例へば地理の關係とか人種とか種々自然的事情があります、其他に幾らかそれを變へて行くことが出來るといふ人意を結付けて歴史生活を解釋したいと思ふ。斯様にして自然現象に對する文化的歴史的和云ふことの意味を明かにして行くことが出來ました。社會思想の問題に此問題を入れて行つたならばどう云ふことになるかと云ふことを、次に説いて行かなければならぬ、即ち其處で初めて吾々の前の問題に繼續することになるのであります。

社會に對して歴史即自然と云ふ考を入れたならば、其結果は前に述べたやうな社會主義若くは資本主義に陥つてしまふことは當然であります。何となれば是等は別に文化事業と云ふ意味を認めないからであります。人間の文化作用と云ふ價値を認めて行かないからであります。然るに若し文化と自然とを區別する觀方から來ると、社會と云ふ一つの生活は一つの文化生活を現はす機關であると云ふやうに考へて來ますからして、單に自然の現象として之を説くことが出來ない、即ち自然を理解し自然科學を組立てる場合に於て、既に我と云ふものの力が働いて居る、と云ふことを吾々は前に述べましたが、其我の働が此文化現象に於ても中々重大な意味を有つて居るものであると云ふ意味が明かになる譯であらうと思ふ。さう云ふ風にして此文化現象の特色が説かれ、隨つてそれからして此文化主義と云ふことの説明が下されて來ると思ふのであります。

七

文化主義とは何であるか、即ち社會改造の問題に對して今述べた文化現象の特色たる文化價値の觀念を結

付けたものに外ならぬのであります。言換へて見れば絶對的文化價値を基礎として居る社會問題解決の思想を文化主義と云ふのであります。文化と云ふ語は文明と云ふやうな語と別に文字に於て著しい差別がある譯はない。文化主義と云ふことは文明主義と云つても大體には差支ない譯であります。今では然し多少深い意味を附けて文化といふ語を使ひます。

文明と云ふのは文明開化と云ふやうな譯で、随分古くから使つて居る語であります。唯世の中が開けて行つて文明になつて行くのであるからして、どんな人でも文明開化を嫌ひない譯でありますからして、文化主義は改めて言ふ必要はない感じが起るかも知れぬ。併ながら此文化主義でも文明主義でも何でも宜いのでありますけれども、斯う云ふ言葉を使ふには其處に何か意味が無い譯はないのであります。唯漠然と同じやうなことを言ふならば、特に文化主義などと云ふことを言ふ譯もないのであります。其處には意味がある。それはどう云ふ意味であるかと云ふと、それは絶對的文化價値を認める所に、文化主義の特色を置きたいと思ふのであります。唯世の中が開けて行くことが宜いと云ふならば、餘り漠然として居つて、文化主義などと云ふことを唱へる必要はないではないかと云ふことを論ずる者もありますが、それはさうであるか知れませぬけれども、文化主義と云ふことは唯開けると云ふ意味ではない、世の中には能く文化生活に必要な道具とか何とかと云ふやうなことが出て居ります、何でもさう云ふやうなことに文化と云ふことを使つて居るですが、それならば文化主義は珍しくないやうに見えますが、さうして一方から見ると分り切つたことだ贅澤だと云ふことになるかも知れませぬ、勞働者の解決をして行かうと云ふときには極く樂な享樂主義とかさう云ふやうな贅澤の思想であると云ふやうな感じを與へるやうなことになるだらうと思ふ、それで今日文



化主義が兩方から板挟みになつて居るのであります。一方の労働主義のやうなことを説いて居る者は、文化主義は贅澤な主義である、民主主義に反對したものである、學者とか知識階級とか貴族とか金持とかと云ふやうな者が唯其贅澤に拵へた名であると説いて居る者があります。一方の人はもう少し内容を與へて行かうと考へて居る。或は昔流の狭い意味の國家と云ふことを付けて考へて居る者があります。所が文化主義は非常に漠然として居つて、場合に依つてはどうも昔の國家主義と違ふやうである。例へば昔の國家主義は軍國主義と結付いて居るが、軍國主義と文化主義とは違ふやうに見える、確に文化主義は軍國主義を歡迎しない。さう云ふやうな所から文化主義は社會主義の一派ではないかと云ふやうに考へられて居る。然るに社會主義の方からは文化主義はブルジョア主義のものだと云ふ。

かやうに、兩方から板挟みになつて居るのでありますが、夫等は何れも文化と云ふ意味の考が粗雑であると思ふのであります。文化主義は絶對的文化價值を認める主義であります。併ながら其絶對的文化價值は内容の方が飽迄も流通自在のものでなければならぬのでありますから、民衆が目前の衣食住の生活を改良して行く状態に對しては、文化主義は好んでさう云ふ状況に一致して行かうと云ふのであります。労働をしなければならぬ、先づ清水を飲むことが大切だと云ふ世の中に對しては清水を與へると云ふ所に一致するのであります。それが即ち絶對價值の現れる所以である。けれども亦清水ばかり飲んだのでは往かない、もう少し味覺が發達して居つて美味しい酒でも飲まなければならぬ、美味しい飲物を飲まなければならぬと云ふ者に取つて、矢張清水で満足しろとさう云ふ偏狭ではないか、美の絶對價值を認めて居る文化主義はさう云ふ生活には適當なる内容を提供することになつて宜からうと思ひます。昨日も流行を追ふのは必ず悪くないと言ひ

ましたが、さう云ふ意味に於て私共も流行は追ひたいと思ひます。流行と云ふことが自然出來て来る。其時に頑固一徹に是は自分の主義だと云ふてやり通してもそれは世の中は通らないのでありますから、瘦我慢を言つても無益の話である、是が矢張流動性を有つた文化主義の結果であります。それでありましたから矢張民衆の實際の狀態と離れやうとは考へて居ない、或は工業社會、農業社會、それ／＼の社會に應じて文化主義はそれ／＼の社會の眞の改造に適當にやつて行くもので、流動性を有つて居つて固定したものではない。随つて其處が一方の偏狭なる保守思想から嫌はれる點だらうと思ひます。或は又或偏狭なる民衆的思想に感れて居る人にも嫌はれることになるか知れませぬ、即ち或一國の文化が一番宜いものである、英吉利の文化が一番宜いものである、或は日本の古代の文化が一番宜いものであると極めてしまはれない、文化主義は何も一國一時代の所に固定して置くのではない、飽迄も現在の要求に最も適當なる所に向つて行くものであります、其處に絶對文化價值を自當に置いてある所に少しく固定した所があるのであります。

さう云ふ風に文化生活を考へて居るのでありますから、文化主義は絶對文化價值の内容の流動性を維持しやうと云ふ考であります。前に哲學の改造に於て眞理相對觀と云ふことを言ひましたが、是等の點も一理あると思ひますが、吾々は眞理は相對的のもいとすると共に其の絶對性も多少認めて置きたいと云ふことを一言言つたと思ひますが、其絶對は私の考は決して内容の絶對ではないのであつて、眞理の形式上或は主觀的の絶對を指したのであります。それで今又此場合に於て文化の絶對價值を説くにも、さう云ふ形式的主觀的の絶對を説きたいと思ひます。其以外に於ては自由であります。それ故に農業社會の文化價值を説くときと商業社會の文化價值を説く時とは、それに應じて異つて行くのであります。そこで先づ形式だけを固定し



やうと思ひますが、其形式の固定したものは何かと云ふと我であります。我に存する現在の要求が今後に於て標準になるものであります。併し我が個々の我であつたならば我儘になりますが、其處に我の絶對性を認めなければならぬ、其考で我を認めるときに、初めて其眞の基礎を探し得たものと思ふ。それを吾々は人格と名付けたり、或は眞の我と云ふことが出来ると思ひますが、結局文化の絶對價値の基礎は人格と云ふことになると思ふのであります。

さう云ふ所から社會の問題を解決して行くことになつたならば、唯物質主義とか或は空漠たる精神主義とかと云ふことでない所の一の新しい觀方が出来やしないか、それが丁度哲學に於て經驗的の觀方と形而上學的の觀方との間に於てその基礎になつて居る知識問題から、批評哲學と云ふ新しい哲學を説いたカントの主義と相投合するものであります。哲學の根據から云ふと、カントの批評哲學に當然行くべきものであります。今吾々は其處の關係を深く論じた譯ではありませぬが、さう云ふ風に考へられると云つて宜からうと思ひます。

私は何も自分の考を以て唯一の主張し得るものとするのでは毛頭無いのであつて、たゞ色々の觀方が出来ると云ふことを考へて見ただけであります。社會問題を觀る場合に於て、今まで色々の觀方があつたけれども、それに對して尙又文化的の觀方と云ふやうな方面から一の新しい解釋も出来ることがありはしないかと云ふことを言はうと云ふのが私の講演の趣意であります。

今日は夫等のことを、餘り一時に述べたので、一方から云ふと思いが連絡して便利な所もありましたが、併し餘り忙しくして十分に諸君に私の思ふことが通じない點があつたかと恐れます。最早時間が參りましたから是だけに致して置きます。

### 山崎實業學務局長の挨拶

實業補習教育講習會も今日無事に終了致しました。此機會に於て、炎暑の折柄にも拘はず連日熱心に御講演下さりました講師諸君に對しまして、感謝の意を表します。又皆さんは殊に御暑い際に此狭い所で御窮屈であるに拘はらず、御熱心に御聴講下さつたことを深く感謝致します、之を以て講習を終了致すことと致します。



大正十一年四月十七日印刷  
大正十一年四月二十日發行

定價金參圓五拾錢

### 文部省實業學務局

實業補習  
教育講演  
集奧付

發行所 東京市京橋區加賀町九十一番地  
大谷仁兵衛  
印刷者 東京市京橋區加賀町九十一番地  
井田耕治  
印刷所 東京市牛込區西五軒町五十二番地  
行政學會印刷所第二工場

大賣場  
內外出版株式會社  
(五五九二三段大橋)下條七段澁西市都摩  
東京海堂書店  
(七六八京車替)目丁三座區橋本市京東

### 發行所

東京市京橋區加賀町十番地  
京城大和町二丁目十四番地

帝國地方行政學會  
朝鮮本部



終

